このページは、小・中学生に向けて梅光学院大学子ども学部子ども未来学科（地域共生ゼミ）の学生が作っています。

※イラスト　渡邊志帆さん、原田陽さん

しものせきキッズページ

「造船所のはなし」

▲7月31日に下関造船所で行われた大型カーフェリー"いずみ"の進水式。海に向かっていく様子は迫力満点！

船を造り、修理する場所である造船所は、昔から下関の産業を支えてきました。今回は、造船所とそこで行われる進水式についてお話します。

下関と造船

たくさんの船が行き交う関門海峡では、船が座礁し、トラブルが起こることがあります。そんな船の修繕をするために造られた造船所の一つが、現在の彦島にある三菱重工業株式会社下関造船所です。今年の12月1日で100周年を迎える下関造船所は、三菱重工業の中で、長崎、神戸に次いで3番目に古い造船所です。初めは主に船の修繕をしていましたが、次第にさまざまな船を造るようになりました。造船は当初、漁船や貨物船が主でしたが、その後、試行錯誤を重ね、現在は、海や海の底を調査する研究船や探査船、たくさんの人と車を運ぶフェリー、海の安全を守る巡視船などを造るようになりました。

進水式とは？

進水式とは、新しく出来た船を初めて水に触れさせる作業のことで、造船台で組み立てられた船がほぼ完成し、水に浮かべても大丈夫という時期に行うものです。

7月31日に下関造船所で、大型カーフェリーの進水式が行われました。この新しくできた船の名前は「いずみ」で、全長195メートル、重さは1万6000トン。設計から進水式までにかかった期間は1年半で、約600人もの人が協力して、この世界に羽ばたく大きなフェリーを造りました。進水方法は、造船台から進水台を滑って入水するというもの。船の先端につないだ綱が切られると、早いスピードで勢いよく海に向かっていきました。

進水が終わると、船は岸壁につながれ、船内の装置の組み込みや船室作業が行われます。最後に、海上を実際に走って、試験を行います。全ての試験に合格すると、船は船主に引き渡され、初めての航海へ向け、造船所を出航します。このようにして、新しい船が誕生するのです。

下関の造船を支える三菱重工業

1884（明治17）年の7月7日、創設者・岩崎彌太郎が日本の政府から借り受けた造船所で船を造ったのが、三菱重工の始まりです。その後、今では日本を代表する企業として世界に知られています。三菱重工で造っているのは、探索船やカーフェリー、巡視船などだけでなく、自動車や飛行機、ヘリコプターなどの部品も造っています。

現在は、アメリカのボーイング社ジェット旅客機「787」の機体に使われる材料の一部を、下関造船所と名古屋航空宇宙システム製作所（名古屋市）で造っており、そのために工場を増設することも決まっています。このように、私たちの生活を支えているのです。

下関市には、三菱重工の他にもたくさんの造船所があり、さまざまな船が造られ、下関の産業を支えています。

9月号の編集記者（左から）
村田宏仁さん、渡邊志帆さん、原田 陽さん

▲以前、造船に使われていた道具の数々。持ち上げるのが大変なほど、重たいハンマー。

▲下関造船所内にある「下関造船所史料館」。分かりやすい説明や展示があります。